

論文の内容の要旨

論文題名 中央アンデス農耕文化論—とくに高地部を中心として—

氏名 山本 紀夫

本論文は、以下のような章立てで構成されている。

序 章 アンデスへ—問題の所在と研究方法

第1章 中央アンデスの環境

第2章 中央アンデスの栽培植物と家畜

第3章 狩猟採集から食糧生産へ

第4章 開花する農耕文化—農耕の発達—

第5章 インカ帝国の農耕文化—主としてクロニカ史料の分析から—

第6章 農牧民の民族誌的研究—食糧の生産と消費を中心に—

第7章 掘り棒から踏み鋤へ—農具に関する民族考古学的研究—

第8章 イモ類の加工技術に関する民族植物学的研究

終 章 根栽農耕文化圏の提唱—議論とまとめ—

以上の内容にも示されているように、本論文の特色は、民族学を中心にしつつも、ひとつの分野だけにとどまらず、可能なかぎり関連諸分野にも視野を広げて、中央アンデスにおける農耕文化の特質を明らかにしようとするものである。すなわち、農耕文化に関係の深い農学はもちろんのこと、生態学、地理学、考古学、歴史民族学（エスノヒストリー）なども視野に入れて研究を実施、論を進めた。

さて、長大なアンデス地域の中で、本論文で中央アンデス、とくに、その高地部に焦点をあてるのは以下のような理由による。

①アンデスの中で、中央アンデスは農耕の起源地と考えられること。

②中央アンデス、とくにその高地部は数多くの栽培植物の起源地であること。

- ③栽培植物や農耕の起源に関する考古学的史料が豊富なこと。
- ④農耕文化に関するクロニカ史料が比較的豊富にあること。
- ⑤現在も伝統的な農耕文化の色彩が色濃く見られること。

以下では、章ごとに要旨を述べる。

序章では、問題の所在と研究方法について述べた。すなわち、中央アンデスの農耕文化についての先行研究はほとんどないこと、にもかかわらずトウモロコシ農耕だけが注目され、もうひとつの主作物であるジャガイモを中心とする、いわゆる根栽農耕は等観視されていることなどを指摘した。このような動向に新たな視点を持ちこむために、調査ではフィールド・ワークを重視することにした。すなわち、「自分の足で歩き、自分の目で見て、自分の頭で考える」ことである。とはいえ、「自分の目で見ると」ことには限界がある。そのため、文献資料にも可能なかぎり目をとおすようにした。しかも、私が専門とする民族学だけでなく、先述したように地理学や生態学、農学など関連諸分野の資料にも目を配った。とりわけ、考古学的資料の乏しいインカ時代の農耕文化に関しては、クロニカ史料を全面的に利用した。

このような方法を取りながら、私はアンデスにおいて 1968 年以来約 50 回、現在滞在が 10 年あまりに及ぶフィールド・ワークを行い、研究を堆進してきた。このフィールド・ワークによって得られた成果を生かし、第 1 章では中央アンデスの環境の特色を明らかにした。特徴的な点は、北部アンデスや南部アンデスも視野に入れて踏査し、これらの地域との比較から中央アンデスの特色を明らかにしたことである。具体的にいえば、中央アンデスはアンデスの中で最も高地部にまで人が定住し、牧畜は標高 5000m 近い高地でも行われており、農耕限界は 4000m あまりに達する。

このような高地での暮らしが可能になるのは、中央アンデスが低緯度地帯に位置することも大きな要因であるが、それだけではない。寒冷な高地でも飼育可能な家畜や栽培植物の開発のおかげでもある。それを詳しく述べたのが第 2 章である。中央アンデスは世界でも有数の栽培植物の多様性のセンターであり、そのなかには寒冷高地にも耐え得る栽培植物や家畜もドメスティケート（栽培化・家畜化）されている。そのなかでも、ジャガイモを中心とする根栽農耕とリヤマやアルパカなどの飼育がきわめて重要であることを指摘した。

第 3 章では、中央アンデスにおける狩猟採集時代から食糧生産にいたるプロセスの見取り図を描こうとした。とくに、中央アンデスで広く見られる農牧複合生活様式については、実験データなどによりジャガイモの栽培化がラクダ科動物の飼育と密接な関係をもつ可能性を明らかにした。

第 4 章「開花する農耕文化」では主として考古学的史料による中央アンデスの農耕文化の発達のプロセスを明らかにしようとした。この考古学的な史料では問題とすべき点がある。それは「考古学的可視性」という問題である。つまり、従来の考古学では、出土して「見えやすいもの」を軽視あるいは無視してきたことである。その結果、たとえばイモ類のように水分を多く含み腐りやすく、食べれば後に何も残らないものはアンデスの考古学では「ないもの」として無視あるいは軽視されてきたのである。そこで、栽培植物そのものではなく、栽培植物を象ったり、描いた土器に注目、これらを分析、同定した結果、先スペイン期の中央アンデスでは多種多様なイモ類が栽培されていたことが明らかになった。

第 5 章「インカ帝国の農耕文化」は主としてクロニカ史料を分析して、当時の中央アンデスにおける農耕文化の特色を明らかにした。この研究によれば、インカ帝国の農耕は栽培技術も用

途も異なる二つの主作物—すなわちジャガイモとトウモロコシ—を中心としたものであった。またジャガイモは一般庶民の日常食であったのに対し、トウモロコシは儀礼的・宗教的色彩の濃い作物であったことも明らかになった。

以上のクロニカ史料の成果を念頭におきながら、私自身がペルー高地の農牧社会で行った民族学的な調査結果が第 6 章である。対象とした地域は、かつてのインカ帝国の中心地であったペルー・クスコ地方のマルカパタ村である。村の領域の大半がアンデス東斜面に位置しており、村民のほとんどはケチュア語を母語とする先住民である。ここで 1978 年から通算で約 2 年間定住して、先住民社会の食糧の生産と消費に焦点をあてて調査を実施した。その社会はインカ以来の伝統的な色彩が濃く、少なくとも農牧畜の生業はクロニカ史料で述べられている記述とあまり変化はなかった。具体的にいうと、高地でリヤマやアルパカなどの家畜飼育を行うかたわら、それよりも低地部ではジャガイモやトウモロコシも栽培して、少なくとも食糧に関しては自給自足体制を維持しているのである。このため、彼らはアンデス東斜面の標高 2000m あたりから標高約 5000m の高地まで一年中登り下りしながら暮らしている (図 1)。このような大きな高度差利用の方法もインカ以来の伝統である。

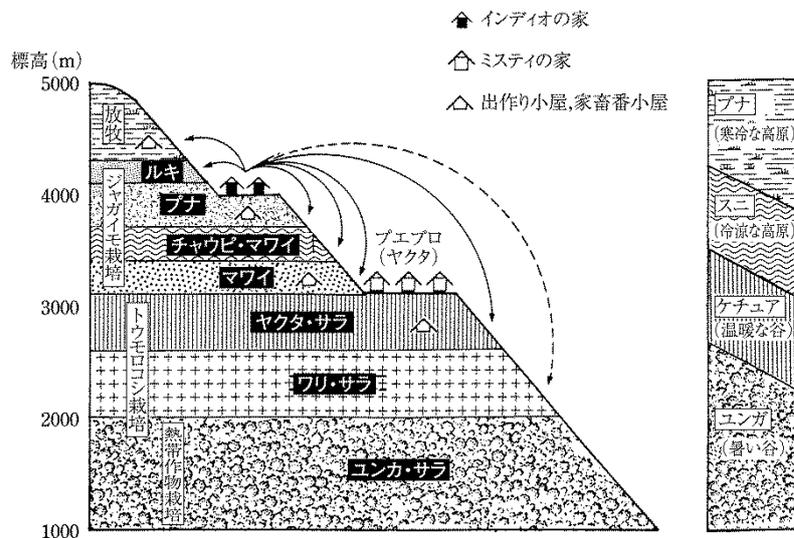


図 - 1 マルカパタにおける高度差利用

第 7 章は、中央アンデス高地に使用が限定される踏み鋤に焦点をあて、その利用法や分布などから中央アンデス高地に限定される理由などを解き明かそうとした。中央アンデス高地の踏み鋤は、インカ時代以来の伝統をもつシンプルな農具であるが、先住民の農作業に不可欠なものである (図 2 - 3)。その分析結果から、中央アンデス高地は根栽農耕文化圏と呼んでも良い地域であることが明らかになった。



図-2 インカ時代の踏み鋤による
ジャガイモの植え付け
[Guamán Poma 1980(1613)]

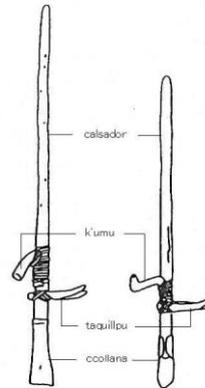


図-3 ペルー・クスコ・マルカパタの踏み鋤

第 8 章は、中央アンデス高地において世界でも例を見ないほど発達したイモ類の加工技術に着目、その加工方法の比較 (図 4)、分布、機能、系譜などを比較検討した。その結果、中央アンデス高地においてイモ類の加工技術が発達したのはジャガイモの倍数体利用のさかんな地域であることが明らかになった。また、この加工が行われている地域は、先述した踏み鋤の使用地域とほぼ一致する。この事実、中央アンデス高地における根栽農耕文化の存在を物語るものである。

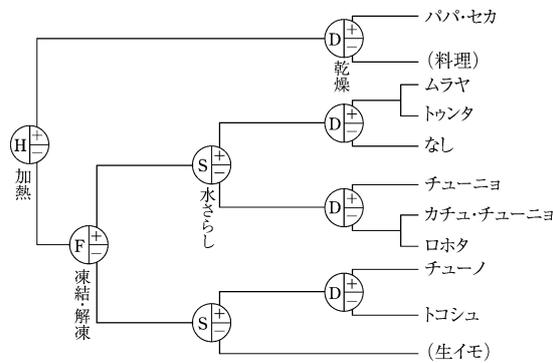


図-4 ジャガイモ加工法の比較 [山本 1982; Yamamoto 1987]

終章は、これまでの成果を踏まえて議論し、中央アンデス高地における根栽農耕文化圏における地域は、ジャガイモ栽培が卓越しているところであり、またリヤマやアルパカなどの家畜飼育も行われ、さらにジャガイモ栽培のための休閒システムも行われている地域であることなどを指摘した。そして、そこはトウモロコシではなく、ジャガイモを主作物とし、主食として利用している地域でもある。これらの事実、中央アンデス高地においてはジャガイモの栽培と利用がきわめて重要な役割を果たしてきたことを物語っており、「まとめ」として根栽農耕文化圏を提唱した。